



日本SPF豚協会だより

2019. 10
No.77

記念事業を終えて

協会創立50年から新たな一步を

一般社団法人日本SPF豚協会

会長 **北島克好**



協会は創立50周年および法人化15周年を記念する事業として、本年9月5日記念セミナーを開催いたしました。また、協会の50年のあゆみを紐解く記念誌『日本SPF豚協会50年史 - 苦悩と模索の半世紀-』を刊行いたしました。これらの事業推進に当たっては、認定農場会員、特別会員、賛助会員ならびに関係団体・会社等、大変多くの皆様に多大なるご協賛とご支援・ご協力をいただきました。皆さまのご厚志に心より感謝申し上げます。

記念セミナーでは会場が満席となる中、Mr. SPFこと協会の赤池洋二・最高顧問に協会創設前後から現在まで、まさに苦悩と模索の50年の歴史を回顧いただくとともに、今後の方向について示唆いただきました。また、昨年SPF豚の生産と流通に関する研究を論文にまとめられた、中京学院大学の仲川直毅先生に、日本の食肉流通からみたSPF豚の肉の流通と消費の現状をもとに”SPF豚の今後の課題”というテーマで講演をいただきました。現在、生産農場会員の、市場流通から一步進めた消費者や販売者への直接的な取組みに併せて、今後伸びていくと予想される中食や外食市場への対応が重要であるとの貴重な提言をいただきました。協会として、会員、ピラミッドともに新たに取り組む課題といえます。

50年史については、2年前から準備委員会を立ち上げ、各ピラミッドの発足から2019年現在までの歴史とともに、これまで協会で保管されていた、協会創設の立役者である故波岡茂郎博士が心血注がれて記録された手書きの”波岡ノート”を忠実に活字化し、博士がノートをもとに編集・寄稿された日本SPF豚研究会会報『All about Swine』創刊号および2号(1992年5月・12月発行)の論文に、未記載の部分の補遺として追加、掲載いたしました。協会設立当時の「苦悩と模索」について記録に残すことができました。全ページカラーという豪華版が制作できましたのも、皆様のご協賛の賜物であり、深謝申し上げます。

また、協会50周年を迎えるにあたって、協会展報『日本SPF豚協会だより』に、6回連続(No.71～76)で有識者より、それぞれ異なった立場からの今後の協会に対する提言をいただきました。

- ① SPFのF(フリー)にこだわる
- ② 養豚産業の新たなニーズや認定農場の立ち位置を改めて分析する
- ③ 会員数の増加とともに、養豚生産者と関係者の防疫意識の共有と向上
- ④ 継続は力なり
- ⑤ 現行の認定基準にプラスした、自らの防御を高める飼養環境評価基準(ソフト)の策定が必要
- ⑥ 防疫方法の基本は何も変わらないが、ブタの育種や再生医療への発展に寄与するには別次元のSPF管理や生産管理が求められる

50年前が現在であれば、SPF養豚は養豚生産のイノベーションとして、官から民へのスタートアップ事業として脚光を浴びたかもしれません。現実には苦悩と模索の50年を経て日本の養豚生産の一角を担う生産基盤に発展しました。

協会の役割も当初の生産基盤の牽引から、認定制度開始以降はSPF豚の価値を高める活動にシフトしてきています。

しかし、基本はあくまで、故柏崎守・前SPF豚農場認定委員長が協会設立40周年にあたり、協会だよりに寄稿いただいた「それぞれの生産者に宿るSPFビッグ・プライド(SPF豚を飼う誇り)に支えられる熱意が受け継がれて、その熱意を具体化する協会が存在した。現状に満足することなく、養豚産業全体にSPF技術を伝搬する熱意を持ち続けることが大切」です。「SPFビッグ・プライド」、このことを肝に銘じて次の50年に向かって新しい一步を踏み出したいと思います。

50周年記念セミナーを開催 ——祝賀会ではサプライズも



満席となったセミナー会場



表彰式で講評を述べる演岡隆文選考委員長（認定委員長）



初受賞となった総合生産成績部門最優秀賞、(株)広島ポークの永野雅彦社長（右）



商品化頭数最優秀賞、(農)八幡平ファームの福島大輔場長（右）



受賞の挨拶を述べる(農)八幡平ファームの大泉俊昭常務理事



小澤真名緒・農林水産省消費・安全局畜水産安全管理課課長補佐

9月5日(木)、東京都千代田区のKKRホテル東京において、協会創立50周年・設立(法人化)15周年記念セミナーおよび祝賀会が開催されました。

通常のセミナー部門と記念セミナー・祝賀会部門の2部構成で行われ、会場となった同ホテル最大収容の「瑞宝の間」の定員を大きく上回る、セミナー207名、祝賀会186名のべ216名の参加をいただきました。

午後1時、坂口一平・協会副会長の司会のもと、まずは通常セミナーが開始、北島克好・協会会長の挨拶に続いて藤田世秀・協会専務理事よりCM認定農場生産成績年次報告がありました。

次に恒例の生産成績最優秀CM農場表彰式が執り行われました。今年度の総合生産成績最優秀農場は(株)広島ポーク(広島県)が初受賞、初めて北海道以外の農場の受賞となりました。また、商品化頭数最優秀農場は(農)八幡平ファーム(岩手県)でこちらは5年連続7度目の受賞となり

ました。

続いて、動物分野における薬剤耐性対策の最近の動きについて、小澤真名緒・農林水産省消費・安全局畜水産安全管理課課長補佐より、情報提供いただきました。

休憩をはさんで記念セミナーが開催されました。

北島会長の挨拶のあと、筒井俊之・農研機構動物衛生研究部門長および小林秀樹・日本SPF豚研究会会長から祝辞をいただきました。

次に記念講演として「わが国におけるSPF養豚の始まりから現在まで」と題し、協会創立メンバーの一人である赤池洋二・協会最高顧問に講演いただきました。まさに協会の歴史とともに歩んでこられた赤池氏の、知識と現場経験に裏打ちされた講演はわかりやすく、協会の50年を理解するのに大いに役立つ、大変貴重なお話でした。

最後は基調講演「SPF豚の今後の展望」と題し、食肉流通がご専門の仲川直毅・中京学院大学経営学部専任講



記念セミナー冒頭で挨拶する北島克好・協会会長



筒井俊之・農研機構動物衛生研究部門長(祝辞)



小林秀樹・日本SPF豚研究会会長(祝辞)



記念講演を行った赤池洋二・協会最高顧問



基調講演の講師、中川直毅・中京学院大学専任講師



祝賀会で乾杯の挨拶をする香川雅彦、日本養豚協会会長



祝賀会の様子



感謝状と記念品の贈呈の後、紺野君子さんから花束を受け取る赤池最高顧問



「認定制度こそ協会の柱」とスピーチする秦政弘・協会副会長



「ホクレン認定農場が受賞を逃し残念」と話す岩瀬俊雄・ホクレン元技監



日浅文男氏(旬道南アグロ)の音頭で一本締めにて閉会

師に講演いただきました。「SPF豚肉には今後まだまだ伸びる可能性を秘めている」として、販路拡大に向けての課題と方向性について様々な分析と示唆をいただきました。

なお、講評・受賞者挨拶、講演要旨等は次号に掲載いたします。

記念セミナー終了後、同会場にて祝賀会が行われました。

香川雅彦・日本養豚協会会長の乾杯の音頭でスタートした祝賀会。目玉は認定農場有志にSPFポークをご提供いただき、KKRホテルの和・洋・中の料理長が部位のバランスや素材を生かす味付けを意識してメニューを選び、腕を振った豚肉料理です。全部で10種類、ほかに恒例の(旬)道南アグロ産の骨付きハムも用意され、SPFポークをたっぷりご堪能いただきました。参加者のみなさんの評判も上々でした。

祝賀会では、サプライズ企画もありました。しばしの歓

談後、司会の坂口副会長より「50周年を記念し、わが国のSPF養豚と協会の発展にもっとも尽力された功労者として、赤池洋二協会最顧問に感謝状と記念品の贈呈をしたい」との提案があり会場からは賛同の拍手。北島会長より感謝状と記念品を手渡したのち、赤池顧問とは協会創立当初から長く親交のある神奈川県獣医師会の紺野君子先生より花束が贈られました。

また、秦政弘・協会副会長や、岩瀬俊雄・ホクレン元技監ら協会とゆかりの深い方々のスピーチもありました。

最後は、協会最古参会員のお一人で北海道養豚生産者協会の会長でもある、(旬)道南アグロの日浅文男氏のあいさつと一本締めでお開きとなりました。

全国から大変多くの方々にご参加いただき、協会の50周年を記念するにふさわしい会となりました。会員、ピラミッド、関係各位、および記念事業にご協賛いただいた皆様方のご協力に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

口蹄疫とは

口蹄疫は、ピコルナウイルス科アフトウイルス属に分類される口蹄疫ウイルス(FMDV)の感染に起因する急性熱性伝染病であり、伝染力が強く、牛、水牛、緬羊、山羊、豚等の家畜に加えて、野生動物を含めた多くの偶蹄類動物に感染します。「口蹄疫」の疾病名は、発症動物の口や蹄周辺の皮膚や粘膜に水疱が形成されることに由来します。近年わが国においては、2000年および2010年の2回、本病の発生を経験していますが、幸いなことに現在では清浄国に復帰しています。しかし、周辺諸国においては本病の発生が継続しており、わが国への本病の侵入リスクは極めて高いと考えられます。

原因ウイルス
および病態

FMDVには、O、A、C、SAT1、SAT2、SAT3およびAsia1の7種類の血清型が存在し、各血清型のウイルスは、ゲノムの構造蛋白質VP1コード領域の塩基配列に基づいて、トポタイプや系統にさらに分類されます。本ウイルスはエンベロープを持たないため、クロロホルム等の有機溶媒には抵抗性を示します。また、中性領域では安定ですが、一般にpH6.0以下および9.0以上では速やかに感染性を失います。そのため、消毒薬としては、酢酸やクエン酸あるいは水酸化ナトリウムや炭酸ナトリウムが効果的です。

豚においては、初期症状として、発熱、食欲不振、嗜眠等が認められます。その後、水疱が舌、口唇、歯齦、鼻鏡、鼻

腔粘膜、蹄部等に認められます。特に、蹄部における水疱形成が顕著であり、跛行により異常に気付くことが一般的です。また母豚においては、乳房や乳頭にも水疱形成が認められます。通常、水疱は短時間で破裂し、潰瘍や糜爛に移行します。しかし、水疱形成が重度となった場合、出血を伴って、蹄部が脱落する場合があります。新生子豚は心筋炎を起こしやすく、死亡率が50%に及ぶ場合もあります。新生子豚以外においては、一般に死亡率は低いものの、発症豚は運動障害と採食困難に陥り、産業動物としての生産性が著しく低下します。

疫学

潜伏期および発症初期の感染動物は、口蹄疫発生時に、主要な感染源となります。特に、感染動物は、病変が形成される前から、分泌・排泄物中にウイルスを排出するため、防疫上大きな問題となります。豚の潜伏期間は、6～10日程度と報告される場合が多いものの、感染ウイルス量が多いと短かく、少ないと長くなる傾向にあり、必ずしも一定していません。また、豚におけるウイルス排出量は、牛等の反芻動物と比較して、最大2,000倍多く、大量のウイルスをエアロゾルの状態で気道から排出します。すなわち、豚の飼養密度が高い地域において本病が発生すると、環境中のウイルス汚染度が高まることによって、空気伝播が起こりやすくなり、防疫が困難になる可能性があります。また、発症動物に形成される水疱中には大量のウイルスが含まれるとともに、あらゆる分泌・排泄物にもウイルスが排出されるため、感染動物が水疱や分泌・排泄物を介して排出したウイルスが、畜舎や農場環境を汚染し、直接および間接的な接触伝播を引き起こします。犬、猫等のペットや野生鳥獣等の非感受性動物による機械的伝播、汚染された飼育器具、機材、飼料、人、車両等を介した間接的な伝播も起こり得ます。

今後の
課題



わが国においては、飼養衛生管理基準や水際検疫の徹底に加えて、万が一の発生に備えた、定期的な防疫演習等の実施により、防疫活動に携わる様々な関係者の知識や経験値を高めておく必要があると考えられます。幸いなことに、2010年以降、本病の発生を経験していない一方で、世代交代により、本病の防疫活動等に従事した経験のない関係者も増えてきていると考えられます。わが国においては、来年2020年に、夏季オリンピックという世界的なイベントが開催されます。これまで以上に外国人の来訪が想定される中で、家畜衛生関係者においては、口蹄疫等の越境性動物疾病の国内侵入防止のために、より一層の注意が必要と考えられます。

ブタの
ウイルス病

連載 No.22

口蹄疫



農研機構動物衛生研究部門 越境性感染症研究領域
口蹄疫ユニット(海外病研究拠点)
ユニット長
深井克彦

連載

種豚の能力を最大限発揮させるための飼養管理、栄養管理のポイント

繁殖成績を引き出すための種豚栄養管理



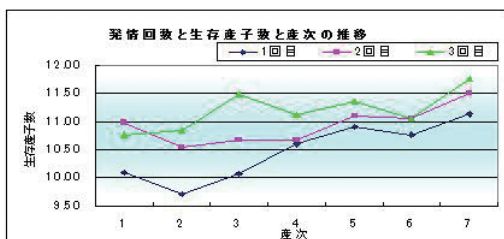
中部飼料(株)研究技術部養豚グループ 石川靖之

若雌候補豚の初回種付けは何回目の発情で行っていますか？各種豚メーカーの資料等を確認すると2～3回目の発情にて初回種付けを行うことが望ましいと記載されていることが多いと思います。では、なぜ初回発情で種付けすることをお薦めしないのでしょうか？これにははっきりとしたデータが出ており(図1)、初回発情で種付けした場合と2回目以降の発情で種付けした場合とでは初回分娩生存産子数が大きく違い、生涯成績にも影響することがわかっています。では例として、240日令に3回目の発情で初回種付けを行うには発情をどうコントロールしたらよいのでしょうか？

まず、240日令で3回目の発情ということから、逆算すると約200日令で初回発情を確認する必要があります。しかし実際の繁殖現場では如何でしょうか？200日令よりも以前に若雌の初回発情を確認していないでしょうか？若雌とは違いますが肥育雌豚では順調に発育していると5ヶ月令(150日令前後)ぐらいで初回発情を確認することができます。肥育用飼料を不断給餌で摂取し、栄養的に十分発情できる状態に達するとこのような現象が見られます。しかし、若雌でこのようなことが発生してしまうのは望ましくありません。仮に若雌が150日令で初回発情を迎えてしまうと3回目は約190日令、4回目は約210日令となり、先述した例のような240日令では5

回目となってしまい、うまく種付けできない可能性があります。ではどうするか？結論から申し上げますと若雌の増体をコントロールし初回発情を遅らせるのです。弊社では若雌の増体を若雌育成用飼料でコントロールした試験区と、一般的な子豚育成用及び肥育用飼料を給与した対照区を設定し、初回発情日齢への影響を確認しました(図2)。その結果、対照区は順調に発育し平均163.4日令で初回発情を確認し、最も早い個体は141日令でした。反対に試験区は平均で197.8日令となり、最も早いものは192日令でした。増体コントロールすることで初回発情をコントロール(遅らせる)できる可能性があります。また別の試験では、育成中の若雌12頭を二区に区分けし、一方は肥育舎にて雄に接触させずそのまま飼育。もう一方は190日令～200日令の間に肥育舎から種豚舎へ移動し、更に雄豚との接触機会を設け飼育。その結果、移動した若雌は移動後1週間以内に全頭発情しましたが、移動しなかった若雌の発情は明確ではありませんでした。このように畜舎移動を伴いつつ、雄豚との接触は発情誘起に対し有効であることも弊社では確認しています。以上のことから若雌の増体コントロールを行うとともに、計画的に若雌の畜舎移動及び雄豚との接触を行うことで発情をコントロールできる可能性があります。

図1 若雌の初回種付け時期と産子数



- 1回目(初回発情で交配)は2回目、3回目よりも産子数が少ない。
- 初産で2回目交配と比較して0.89頭、3回目交配と比較して0.68頭少ない。

表1 若雌の発育と初回発情日齢

項目	試験区 (n=9)	対照区 (n=9)
給与飼料	種豚若雌育成用飼料	子豚期育成用及び肥育用飼料
飼育期間 (日)	106.0	106.0
開始体重 kg	33.0	32.9
終了体重 kg	112.9	124.0
期間増体 kg	79.9	91.1
日増体重 kg/日	0.75	0.86
飼料摂取量 kg/日	2.78	2.70
飼料要求率	3.70	3.14
平均初回発情日齢	197.8	163.4

- 注)
- 試験区の平均初回発情日齢は上記飼育期間中に発情確認できず、その後種豚舎へ移動し、雄と接触することで発情誘起、確認した時点の日齢。
 - 対照区は給与期間中に全頭発情。肥育用飼料給与での発情コントロールは難しい。

協会からのお知らせ

今年もちくさんフードフェアに出展します・

毎年10月に開催されている公益財団法人日本食肉流通センター主催「ちくさんフードフェア」。今年も10月12日(土)、13日(日)に神奈川県川崎市、日本食肉流通センター敷地内で行われます。「川崎みなと祭り」と合わせて開催されるこのイベント、去年は好天に恵まれ、例年を上回る13万4,000人の来場者がありました。協会は今年、10回目となる出展をいたします。

パネル展示、認定農場産SPFポークのしゃぶしゃぶ試食、アンケート調査、SPFポーク加工品の当たる抽選会などを実施します。しゃぶしゃぶは毎年大好評で、例年ブース前に長い列ができます。また、岩手県の認定農場、(農)八幡平ファーム他生産「八幡平ポーク」のキャラクター「Bu太」も昨年に続いて登場します。

入場は無料です。お誘いあわせの上、ご来場いた

だき、協会ブースにお立ち寄りください。お待ちしております。

日時 10月12日(土)、13日(日) 10:00～16:00

場所 (公財) 日本食肉流通センター
神奈川県川崎市川崎区東扇島 24

TEL.044-266-1172

http://www.jmtc.or.jp/event/pdf/fear_poster2019.pdf

交通機関のご案内

- JR川崎駅東口・京急川崎駅より会場直行無料バスが出ます(市営バス11番のりばより随時運行)
- 川崎市街から車で約30分(国道132号線、海底トンネル)、首都高速湾岸線東扇島出口から約8分、無料駐車場完備



昨年のちくさんフードフェアの様子



●認定委員の交代

サンエスブリーディングピラミッドの認定委員が下山安氏より轟光博氏に交代いたしました。

●50周年記念誌『日本SPF豚協会50年史』が完成

協会創立50周年記念事業の一環として制作しておりました記念本『日本SPF豚協会50年史—苦悩と模索の半世紀—』がこのほど完成の運びとなりました。

大変多くの皆さまにご協賛をいただいたおかげで、オールカラーの豪華版となりました。9月5日のセミナーにご参加いただいた方には記念品として差し上げております。また、ご出席がかなわなかった協賛各位にもお送りいたしました。ご協力感謝申し上げます。

<訂正> 50年史88ページ、年表「SPF豚発展史」1994年の項、波岡茂郎氏の波の字が間違っておりました。お詫びして訂正いたします。

プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



SPF豚と トマトの カプラーゼ焼き

●レシピ提供・海鮮居酒屋 蛇之助

料理長 松原 一（北海道札幌市）

今回はあっさりしたモモ肉にトマト、モッツアレラチーズを一体化させ、洋食前菜風に仕上げた逸品をご紹介します。コクやうまみをプラスするアミ脂は食肉店で注文できます。ぜひお試しください。

●材料●

- ・ SPFポークモモ肉 50g
- ・ モッツアレラチーズ 50g
- ・ トマト 1/2個
- ・ アミ脂
- ・ バジル 少々
- ・ 油 少々
- ・ 付け合せの野菜 お好みで

●作り方●

- ① モモ肉は5mmの薄さにカットします。
- ② トマトは3枚にスライス、モッツアレラチーズも3つにカットします。

- ③ 肉、トマト、チーズの順に重ねるように並べて巻きます（重ねるときに小麦粉（分量外）を水で溶き、間に塗るとはがれにくくなります）。
- ④③にアミ脂をしっかり巻き付け、バジルをふりかけて、油を少々引いたフライパンで焼きます。
- ⑤ 肉の表面に焼き色が付き、チーズが溶けてきたら火を止め、カットします。
- ⑥ お好みの野菜を添えて盛り付けます。

★鈴木シェフからのアドバイス

重ねる肉、トマト、チーズを同じ厚さにすると、切った時の断面がきれいに仕上がります。

認定情報

●令和元年度認定農場 [9月認定]

北海道・ササキSPFファーム、(有)山中畜産長沼農場、同千歳農場、(有)浅野農場、(有)高橋畜産、(有)ゲズント農場繁殖センター、同肥育センター、**岩手県**・(有)ケイアイファウム北上農場、(農)八幡平ファーム、(農)ジョイフルファーム八幡平、**秋田県**・全農畜産サービス(株)秋田SPF豚センター、(有)ファームランド、(有)ポークランド第二農場、**茨城県**・常陽発酵農法牧場(株)、(有)米川養豚場、オヌマファーム、山本ファーム鹿嶋、**栃木県**・サンエス大渡農場、(有)K&Tコーポレーション、**群馬県**・(有)ほそや、**長野県**・長野県農協直販(株)SPF種豚センター、(有)岩垂原エスピーエフ農場、(有)クリーンポーク豊丘農場、(農)エスピーエフこがねや第一農場、**千葉県**・岡野茂樹養豚場、(有)東海ファーム倉橋本農場、同猿田農場、同第2肥育農場、同第1肥育農場、(有)菅井物産飯岡SPF農

場、(有)下山農場第1農場、同飯岡農場、**岡山県**・全農畜産サービス(株)岡山AIセンター、**鳥取県**・(株)西日本ジェイエイ畜産矢下繁殖農場、同上馬場肥育農場、同矢下肥育農場、**香川県**・(株)七星食品多和ファーム、**長崎県**・大西海ファーム中浦肥育農場、同七釜肥育農場、**大分県**・(有)九重ファーム、同第2農場、**宮崎県**・(株)ファームテックえびの種豚場、(株)ナンチクファーム守山北郷農場、**鹿児島県**・(株)シムコ阿久根事業所、(株)ファームテック大口農場、(有)新留養豚、同第二農場、鹿児島いずみ畜産(株)江内農場、そお元気(株)ファーム野方農場、高山大規模実験農場生産農場、同肥育農場（以上51農場）

※次回認定委員会は令和元年12月5日(木)の予定



**グリーン&ウォーター(株)
水処理事業部**
(東京都中央区)

**SPF豚農場を
廃水処理技術で支える
パートナー**



水処理事業部の皆さん。右から2人目が衛藤昭彦さん。

今号では「SPFのひと」番外編として協会の賛助会員会社をご紹介します。

協会の賛助会員は現在法人会員19社、個人会員5名。その中でも最も早くから賛助会員として、長い間協会事業推進にご協力いただいている会社の一つが、グリーン&ウォーター(株)です。

1970年(昭和45年)、伊藤忠林業サービス(株)として設立。もとは海外原木輸入事業の会社としてスタート、3年後には伊藤忠林業(株)と社名変更し、国内事業の強化を図るため造園、緑化、ゴルフ場建設などの事業を推進する一方、食品加工工場や畜産農場の廃水処理事業を展開してきました。

その後、合併等を経て2010年(平成22年)、ITCグリーン&ウォーター(株)に社名変更、2014年(平成26年)、現在の社名となりました。

現在の水処理事業の大きな柱は複合ラグーンシステム(低負荷・回分式活性汚泥処理法)による廃水浄化システムの設計・施工・アフターケアまでの一貫したエンジニアリングです。畜産廃水、食品工業廃水処理分野で高い実績があります。中でも養豚場の廃水処理においては、トッププラントメーカーとして高い信頼と評価を得ています。会員農場の皆さんの方がよくご存知かもしれません。

協会とのかかわりは、伊藤忠グループのつながりから、伊

藤忠飼料(株)の直営農場や(株)シムコのGP農場へのプラント導入が始まりだったそうです。ラグーンシステム開発当初からの長いお付き合いが個々の農場と続いています。

同社のラグーンシステムを導入する農場は比較的規模の大きいところが多く、特に新設農場の場合は、廃水処理や臭気問題等で地元住民の理解を得ることは大変重要です。

水処理事業部担当取締役・衛藤昭彦さんによれば、SPF豚CM農場の新設にあたっては、担当者が経営者とともに説明会等に足を運び、正しい理解と協力を得るよう努めたそうです。農場を水処理で支えるパートナーでもあります。「遠隔管理システムを用いた日々のチェック、メンテナンス、緊急時の対応と、プラント導入後の仕事の方が多いかもかもしれません」と衛藤さん。

これからも水処理に専念し、養豚場の廃水処理を支えていきたいという衛藤さん。認定農場に望むことをお聞きしたところ、「SPF豚農場は特に多産系母豚の導入等で農場の生産性が上がっていることから、浄化設備等の増設はぜひ早めに検討していただけたらと思います。問題が起きてからではおそいですから。何でもそうですが、余裕が大事だと思います」とのことでした。ますます重要になる環境問題対策、農場からすればつい後回しになりがちなのですが、心に留めていただけたらと思います。(編集部)

**編集
後記**

協会創立50周年記念事業も無事終了と思った矢先、強烈台風15号。千葉県は被害は甚大で、思いもかけぬものでした。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。未だに出口の見えない豚コレラは関東にも飛び火、恐れていたことが現実。アフリカ豚コレラも朝鮮半島に南下。生産者の皆さんの緊張感MAX状態でしょう。しかし、ここは冷静に自農場の防疫システムを見直してみるべきです。伝播原因の主たるものは、人とモノ(車、野生動物含む)。原因に対する徹底した対策を細部まで考えることが大切では。特に人との接触は、義理・人情を排斥した取り組みが肝心です。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第77号 2019年10月1日発行(季刊)
発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail:j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀